



「花と心を通わせることが大事です」と、嶋村さん

輝いています

ひと

しま ちら しゅん どう
嶋村 春道 さん

春草流いけばな家元教授

生け花を通じて地域に彩りを

摘

み取った花に再び息吹を与え、輝きをもたらす生け花。限らない美を追及するこの芸に魅せられ、「一生勉強です」と話すのは、春草流いけばな家元教授、嶋村春道さん(中央3丁目)です。芸歴50年以上、日本いけばな芸術展など数々の展覧会に出展する傍ら、公民館や市外の高校などで講師を務め、伝統文化の継承に一役買っています。

22歳の頃に春草流の門を叩いた嶋村さん。伝統を重んじながらも個人の発想を自由に組み合わせる流派の教えの下、腕を磨いてきました。そんな嶋村さんがたいせつにしているのは、花本来の生命力を表現することです。生け花では花材や花器、色彩などのさまざまな要素が出来栄えに影響するため、これまでの経験で培ってきた自身の感性と向き合いながら、長い時間をかけて構成を練り、作品を仕上げていきます。展覧会では、そうして出来た作品を見に足を運んでくれた人と交流が生まれることも。「花だけではなく、人とも触れ合うことができるんですよ」と、目を細めます。

本格的に指導者としての道を歩み始めたのは今から14年前。「人生を華やかに彩ってくれた生け花の魅力を多くの人に知ってもらいたい」との思いで、学生から高齢者まで幅広く教えています。講座では、初心者には花を美しく見せるための基礎を丁寧に教え、経験者には個人の感性を尊重しながら完成まで優しく導きます。生徒からは分かりやすく、楽しく学べると評判で、リピーターもいるほどです。

5年前から市内でも活動を行うようになり、来月8日からは西公民館で講座を開催します。「忙しい日常を忘れて花と触れ合う癒やしの時間を過ごしてほしいですね」と、ほほえむ嶋村さん。これからも生け花を通じて、地域に笑顔の花を咲かせていくでしょう。

今月の河鍋暁斎記念美術館

天才絵師の作品 巖にあり

— No.17 —

Kyosai
Kawanabe

現在の茨城県古河市で生まれる。浮世絵や狩野派を学び、江戸・東京の庶民から人気を博す。明治9年、万国博覧会に肉筆画を出品。14年、内国勲業博覧会で日本画の最高賞受賞。娘の暁翠も日本画家。



かわなべ きょうさい
河鍋 暁斎
天保2年(1831)
～明治22年(1889)

暁斎は晩年、日課として観音菩薩像や天神像(菅原道真公)を描き、たまると毎月寺社へ奉納しました。本図は明治22年(1889)1月3日と記されていますので、暁斎歿年に描かれたと分かります。賛(作品中に書かれた詩や文など)は、駿河台狩野家の菩提寺・上野護国院第22代住職永順師が記した観音経の一節です。この日課図は、1月17日に護国院へ奉納されたのでしよう。観音の柔和な表情の中でも特に目は「慈眼」といい、慈悲の心をもって衆生を見るとされます。この静かな面持ちの観音図は、現在知られる暁斎最後の日課図です。

河鍋暁斎記念美術館 10月25日(水)まで

「かんかん、にっこり 表情」展

開館 = 午前10時～午後4時

休館 = 木曜日

毎月26日～末日

ところ = 南町4-36-4

入館料 = 一般320円

中学生～大学生210円

小学生以下105円

(20人以上の団体は要予約)

詳細 = 同館 ☎441-9780



展覧会の詳しい内容は美術館のホームページをご参照ください



暁斎筆
「日課観音」

本作品は展覧会で御覧いただけます